クローネンバーグふうの助走

飯島　みどり

今この雑誌を手にしたあなたはどこにいるのだろうか。そもそも「手にして」いるだろうか。本誌を「手にして」いるとすれば、そのあなたはグーテンベルク星人、ひょっとするとユークリッド星人かもしれない。一方、「手にして」いないあなたはさしずめグーテンベルク星生まれのバルタン星人か、ユークリッド星に暮らして長いバルタン星人というところか。

「手にして」しまったグーテンベルク星人は、運悪くこのページを開く可能性が高くなる。「手にして」いないバルタン星人には初めからスキップされている頁かもしれない。おっとそこのあなた、クリックする場所を間違えましたね？

全学共通カリキュラムが施行されて20年の歳月が流れ、本誌も20号目を数えることとなった。20年のうちにグーテンベルク星は人口減の一途をたどり、今後は間違いなくバルタン星が隆盛をみるだろう。「いつ、どこで」に制約されるグーテンベルク星から「いつでもどこ（から）でも」を誇るバルタン星へ。「いつでもどこからでも」を可能にする系は、死すべき存在としての人間の限界を打ち破ろうとする試みとも見え、記憶を含めた人間の認知構造を大幅に揺るがす、もしくは根底から改編する時代をもたらすのであろう。「～の時代」などという時間の斬り分け方そのものが消失するに違いない。

目下、現世における趨勢は脳の外部化である。脳の働きを体外の小型コンピュータにどんどん移管中、クローネンバーグ風に言えば、脳細胞が腕を介し、片手に握られた人工知脳にみるみる吸い取られていっている体である。今のところチップを体内に埋め込んだバルタン星人がキャンパス内を闊歩している気配はまだない。もっとも「いつでもどこからでも」を手にしたバルタン星人がわざわざキャンパスという「ここ」に現われるべき必要は、どこにもないのだが。

「いつ、どこで」が意味をもつ世界から、「いつ、どこで」の意識されない宇宙へ。日本語の「ここはどこ？」を英語に訳すと“Where am I？”、つまり「わたしはどこにいるのか？」になるのだと学んだグーテンベルク星人は、その違いに発想＝認知＝世界観の違いを垣間見ようとしたものだが、主体がいまどこにいるのかを問う必要がなくなり、「ここはどこ？」を意識しなくてよくなった世界において、果たしてどんな問いが問いとして成立するのだろうか。

20年後、キャンパスが無人の野――ベトナム戦争を描いた往年の名画のごとく――となっていることを回避すべきなのか。だとすれば、どうすべきなのだろうか。本号を「手にした」読者がページをめくりながらつらつらと想いをめぐらせて下さるなら幸いである。

いいじま　みどり
（本学異文化コミュニケーション学部准教授／
全学共通カリキュラム運営センタースペイン語教育研究室主任）